第13期社会工学研究会
アジアダイナミズム班

わこう
倭寇とモンゴル帝国史
～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～

学 部 生　：田中　天野　羽田　山埜
大学院生　：三田　谷ケ崎　北山　森　森田　多田　杉
修 了 生　：光永
指導教員　：金美徳　水盛涼一

研究目的・方法

- ✓ アジア班が**目指す論文**は、歴史の視点から現代・将来を展望する
- ✓ **文献研究**と**フィールドワーク**を中心に研究活動を行う
- ✓ **歴史的観点**、**経営組織論**、**国際経営論**からも分析
- ✓ フィールドワークは社会情勢や訪問先の都合等も踏まえ計画
- ✓ 2020年は新型コロナウイルスによる世界的な感染拡大を踏まえ、

パンデミックの歴史研究を通じ、**ポストコロナの世界**を考えた

2021年度のテーマは・・・・・**倭寇**

2017年～2020年　論文の結論

2017 「モンゴル帝国のユーラシア興隆史」 総107頁

得られた示唆

1. 「経済連携」による「平和と安定」
2. リーダーの「思想」と「視野」

2018 「モンゴル帝国の興隆と衰退」総244頁

得られた示唆

1. 拡大から縮小過程の生き方：成長だけではない生き方
2. リーダーの資質：資質とガバナンスの低下
3. 祖国という感覚が薄いからこそ世界統一ができたのか

2019 「モンゴル帝国と朝鮮半島」総84頁

得られた示唆

1. 大帝国の属国でありながらも自らの価値を最大化する立ち回り
2. 柔軟な思考と強固なアイデンティティによる国家（組織）維持

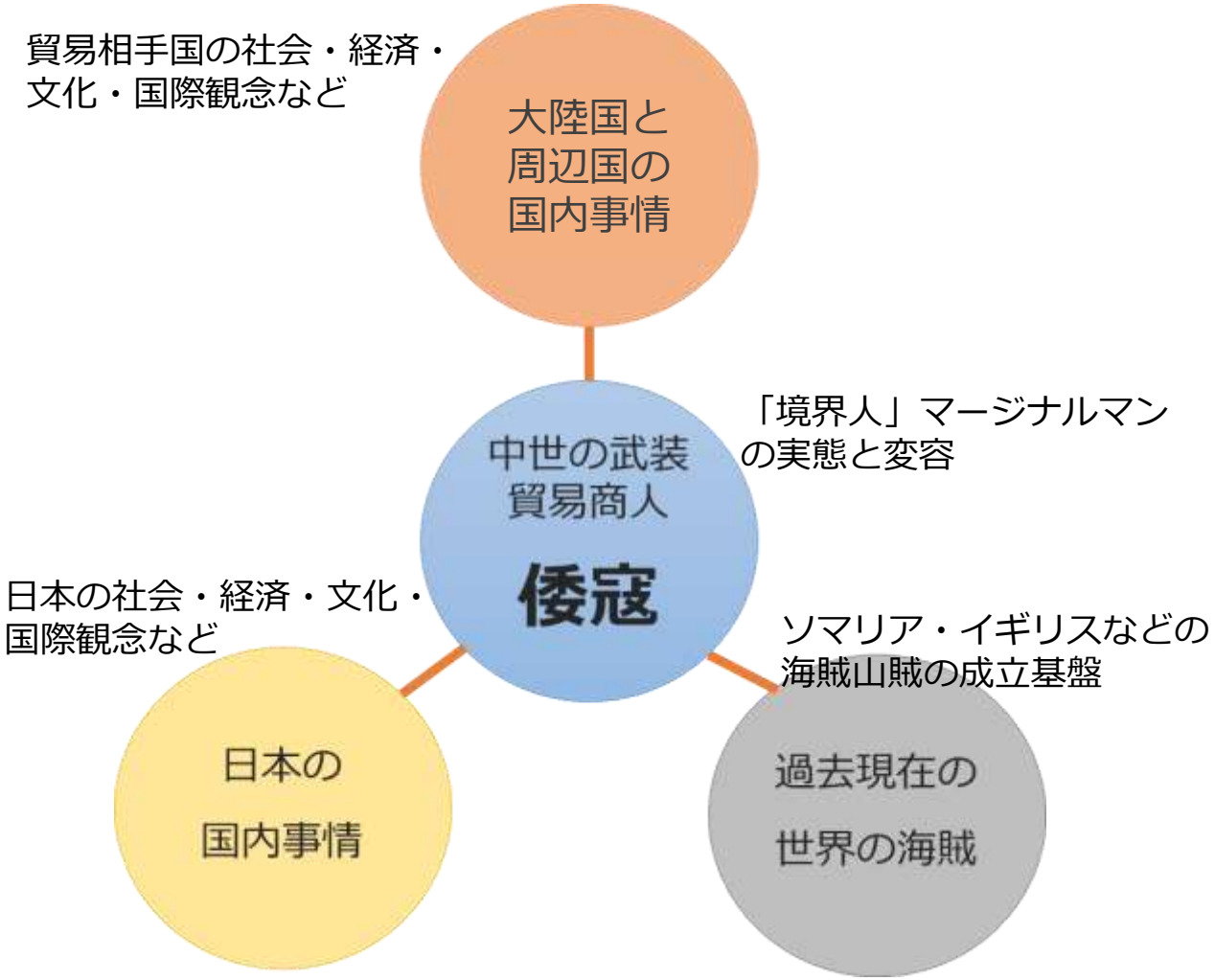
2020 「パンデミックのユーラシア史とポストコロナ」総118頁

得られた示唆

1. パンデミック発生時における人間の心情・行動変化
2. 現代に活きる日本人特有の衛生観念と気質・文化

2021年のテーマ（モンゴル帝国史5年目）

下記図を基に問題意識を抽出



現代の保護貿易路線と当時の貿易状況を照らし合わせつつ、過去のモンゴル研究を活かし、倭寇を研究する

テーマ構成

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去・現在の世界の海賊

問題意識（合計13件）

1．中世の武装貿易商人　倭寇

- 王直とは何者〖谷ヶ崎〗
- 「境界人」として、アデンティティとは何なのか〖田中〗
- 武器の変遷から見る倭寇〖羽田〗
- マージナル・マンが当時の日本国の政治に及ぼした影響〖森田〗

2．大陸国と周辺国の国内事情

- 【中国】後期倭寇の南方中国人と、華僑の始まりとの関連性はあるのか〖光永〗
- 【中国・モンゴル・朝鮮】歴史の分岐点をつくった李成桂は、モンゴル（北元）中国（明）女真族（満州）倭寇とどの様に向き合い、対峙・対処してきたのか〖光永〗
- 【中国】元・明の国としての権勢が弱まった時に倭寇が活発になったのではないか〖杉〗
- 【朝鮮】他の国から日本（対馬）はどういった認識だったのか〖天野〗
- 【琉球】倭寇がもたらした琉球・奄美への影響～思想・文化・言語の形成～〖森〗

3．日本の国内事情

- 当時の日本の国内事情は倭寇発生にどのような影響を与えたのか〖多田〗
- 日本から見た倭寇はどのような位置づけになっていったのか〖田中〗

4．過去現在の世界の海賊

- 海賊は絶対的な悪なのか〖三田〗
  国家に振り回された海賊〖山埜〗
- ソマリランドの海賊から倭寇を俯瞰して見えるものとは。時代が生む海賊について〖北山〗

関連年表（13～16世紀）

世紀	中国・モンゴル帝国	高麗・朝鮮	日本
13世紀	1252年　ビルマよりペスト流入 1271年　**元　建国**	1223年　『高麗史』に倭寇の記事がはじめて記載される 1244年　日本船高麗に漂着、略奪	1274年　**文永の役** 1281年　**弘安の役** 1297年　徳政令を発令
14世紀	1305年　元が5つに分裂 1363年　倭寇が蓬州を襲う 1368年　**明　建国** 1383年　明で海禁の制を厳重にする	1358年　高麗では倭寇により財政が窮乏 1372年　琉球の中山王が明に朝貢 1392年　高麗が滅亡し **李成桂即位**	1350年　倭寇が高麗の各地を襲う（倭寇の活動が激化） 1366年　高麗の使者が出雲に着岸し、室町幕府に倭寇の禁止を要求
15世紀		1404年　室町幕府と国交回復、日朝貿易が盛んになる	1419年　**応永の外寇** 1467年　**応仁の乱**がはじまる
16世紀		1510年　**三浦の乱**が起こる	1523年　**寧波の乱** 1543年　種子島に鉄砲が伝わる 1592年　**文禄・慶長の役**

出典：倭寇 海の歴史（田中健夫）倭寇関連年表より筆者作成

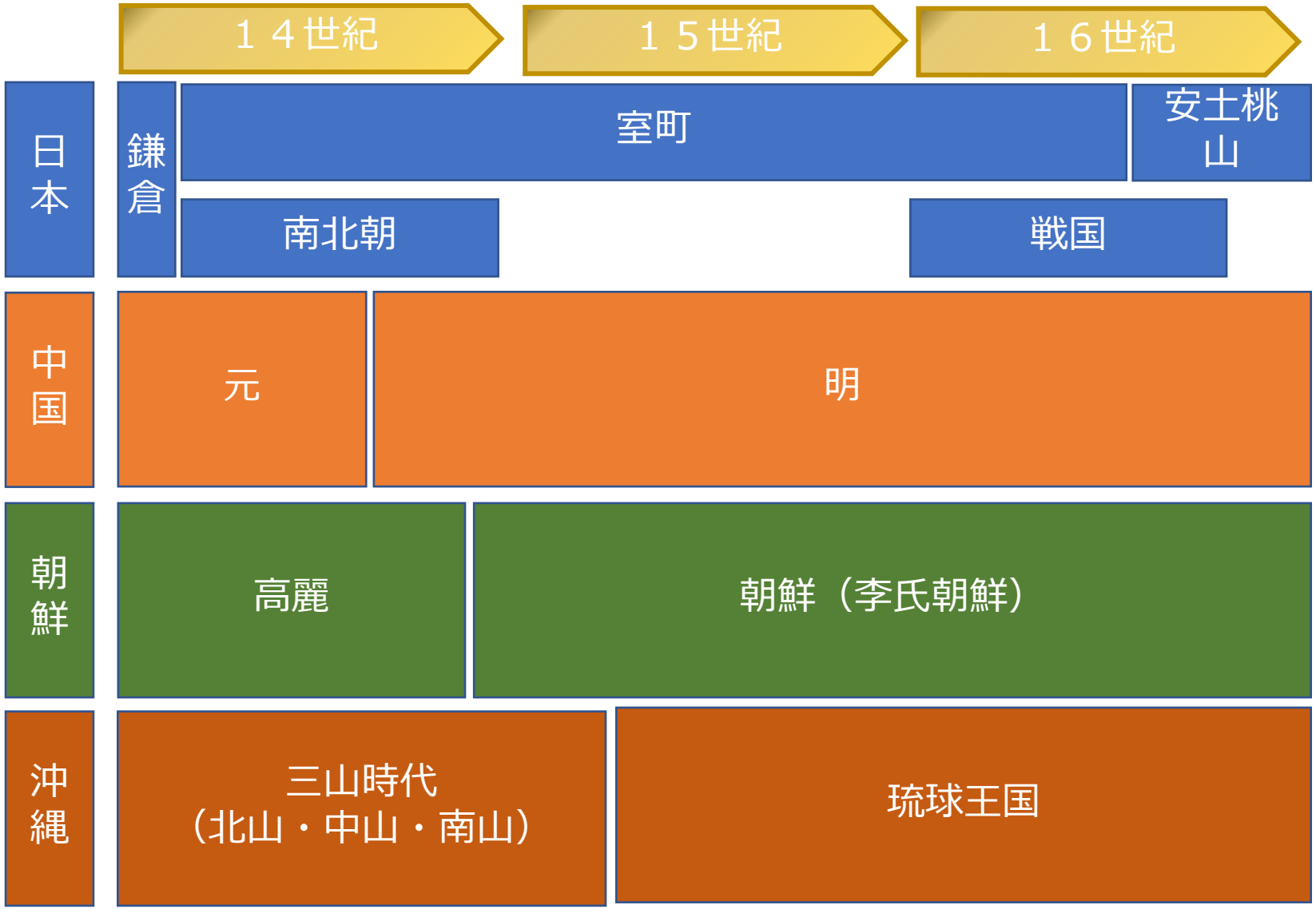
時代背景

前期倭寇

14～15世紀

後期倭寇

16世紀



出典：「東アジアと志布志城の関係年表」（志布志市教育委員会『国指定史跡「志布志城跡」』2014年4月1日改訂）より谷ヶ崎作成

倭寇とは

- 一般的に認識されている**「倭寇」**は、
〔A〕 **14～15世紀の倭寇**（主に海賊活動）と、
〔B〕 **16世紀の倭寇**（主に密貿易活動）とに大別

- 倭寇は東アジアの沿海諸地域を舞台とした海民集団の一大運動であり、**構成員は日本人に加え、朝鮮人・中国人・ヨーロッパ人**

- **倭寇の活動**は東アジア諸国の国内事情を母体とし、**国際関係の歪みを引き金として発生**
（〔A〕蒙古の高麗侵入による進奉貿易の断絶／
〔B〕明の海禁政策による密貿易化）

- 中国大陸・朝鮮半島・日本列島・琉球列島・台湾・フィリピン・南方諸島地域の**諸国人民と歴史に関わりながら消滅**していった

出典：東京大学史料編纂所の所蔵「倭寇図巻」富豪宅から獲物を持ち出す倭寇たちか

14～15世紀の倭寇

行動目標　：米穀などの生活必需品、ヒト
活動地域　：高麗（朝鮮）の南部沿岸
　⇒ 内陸・奥地への深侵入、明沿岸・・・朝鮮と交互
根拠地　　：対馬・済州島
人数規模　：兵数～3,000／船数～400余隻　・・・大規模なもの／騎馬隊有り
構成　　：倭人*1～2割、沿岸地域の賤民*倭服・倭語を用いる海民、高麗・朝鮮人含む

〔対抗措置〕
朝鮮による倭寇の懐柔策

①投化倭人
　内容　：官職に取り立て〔日本居住者含む／接待・貿易権利〕
　　⇒朝鮮政府中枢へ進出
　構成　：対馬・壱岐・松浦の出身者等
　対応　：倭人同士で連携出来ないよう各州群に分置
②使送倭人・興利倭人
　内容　：使人として認定／商業活動許可者として認定
　構成　：西日本諸大名（海賊大将軍）の家臣等
　　・・・対馬宗氏、九州探題渋川氏、肥前松浦党の諸氏、筑前宗像社、薩摩島津氏等
　対応　：開港場としての三浦〔富山浦・乃而浦・塩浦〕　⇒倭人居留地
③もとのまま海賊
　⇒中国大陸へ　・・・〔対抗措置〕明による「沿岸警・防備の厳重化／日本への外交折衝」

前期倭寇

14世紀～15世紀の日本は、鎌倉幕府滅亡期であり、モンゴル時代の富の残影を求め、武装勢力（倭寇）が海賊行為を行っていました。

16世紀の倭寇

行動目標　：密貿易の調停、諜報活動　＋官憲対策のため武装　⇒癒着・略奪・侵寇
活動地域　：中国大陸沿岸〔浙江・福建・広東〕　⇒フィリピン・南海地域
根拠地　　：五島・薩摩・平戸（日本）、中国大陸沿岸、琉球（沖縄本島・台湾）
人数規模　：兵数50,000～60,000／船数～1,000余隻
構成*　　：明人主体、倭人、朝鮮人、ポルトガル人

*明官憲が自分の功績とするために明の盗賊やポルトガル商人も倭寇とひとくくりにしていたケース有り

〔対抗措置〕
明による倭寇対策

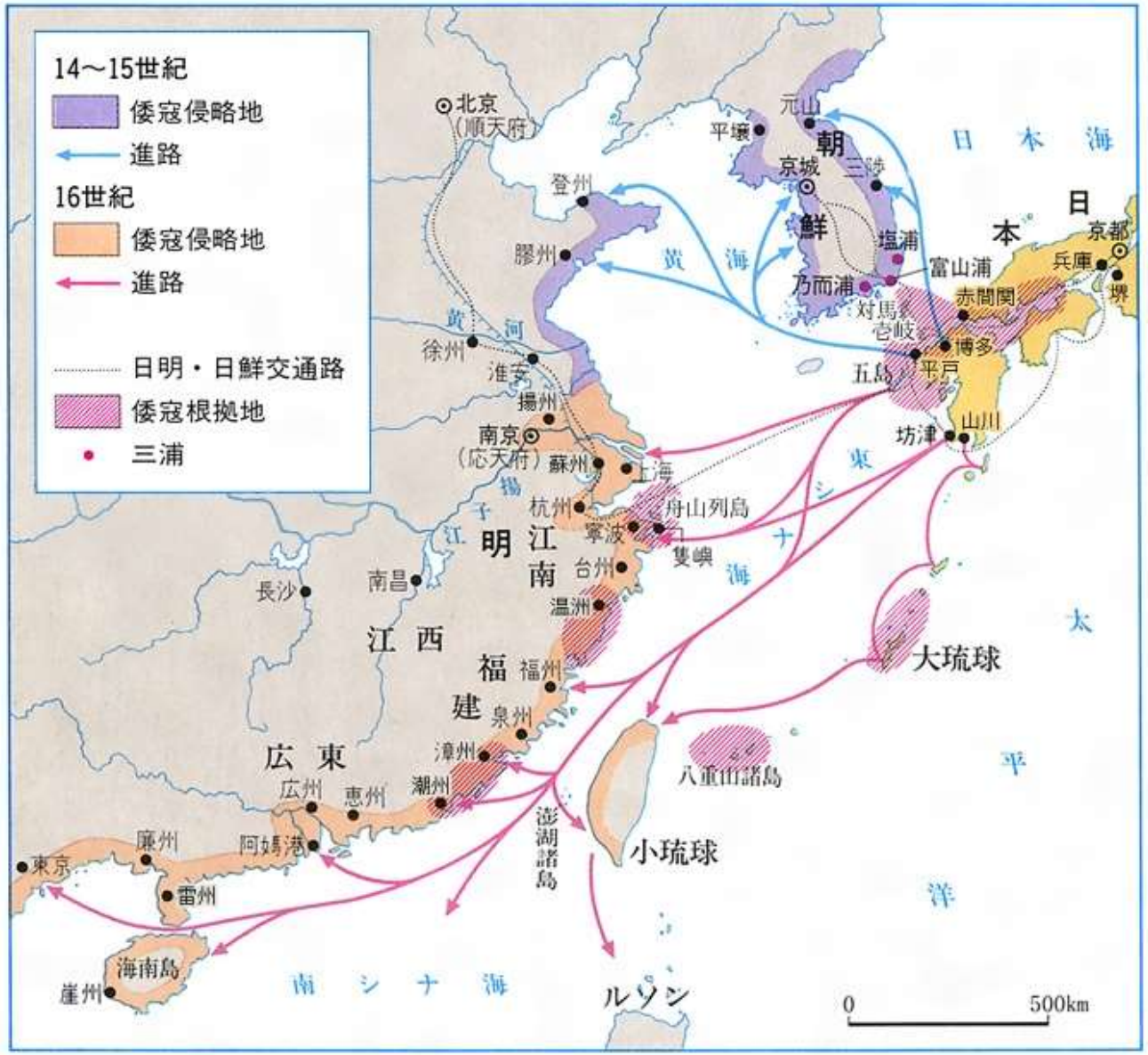
①警備強化
　内容　：沿海の要衝に築城・官兵配置、沿海住民の内陸部疎開（清野の法）
　効果　：一部地域での一時掃討も、倭寇からの反撃あり一進一退の攻防
②倭寇首領の説得・謀略
　内容　：最大勢力であった王直（倭寇国の王）に海禁を緩め、貿易を許すと説得
　結果　：望郷の念に駆られた王直は明政府に投降（後に斬首）
　効果　：王直の就縛が他の倭寇集団に失脚につながり、弱体化　⇒転戦の末消滅へ
③海禁令の解除
　背景　：倭寇の主原因が海禁と深い関係を持っていることが世論によって指摘された
　結果　：200年続いた海禁令を解除*（中国内地人の海外渡航許可・密貿易の公許化）

*南海方面への出航貿易に限定、日本渡航と禁制品の海外帯出は継続禁止

後期倭寇

足利義満の明朝服属・日本国王拝受も今は昔、貿易をめぐる現地での暴力行為が原因で国営貿易は途絶。ふたたび密貿易の時代へ。中国側はいよいよ富裕になり、周囲からその富を狙われている。

倭寇の活動地域



出典：倭寇の侵略地と根拠地 ©日本大百科全書（ニッポニカ）

（現在でいう）
日本・韓国・中国・台湾の
沿岸部・海域

テーマ構成

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去現在の世界の海賊

１章 中世の武装貿易商人 倭寇

１.倭寇の原点と実像　（担当：谷ケ崎）

ー　古代海人族から新羅商人そして、中世倭寇へと繋がるもの

日本古代の海人族

九州を拠点とした
安曇氏 等

海人族
（かいじんぞく、あまぞく）
弥生BC5世紀～3世紀に活躍

・航海、漁労など海上において活動
・目のふちに入れ墨
・4世紀以降は海上輸送で力をつける

朝鮮古代の新羅商人

新羅商人
7世紀～9世紀に活躍

・内乱と天候不順で治安悪化
・海賊から商人へ

14-15世紀の倭寇

中世倭寇国の王・王直

王直
中世16世紀の時代に活躍
<生年不詳－1560年没>

・智略に富み、人に惜しみなく施し、信望は厚かった
・学問もあり計数にも明るく、衆望をあつめる性格をそなえていた

・モンゴル帝国の侵攻（元寇）によるダメージ
・命をつなぎとめるための海賊行為

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

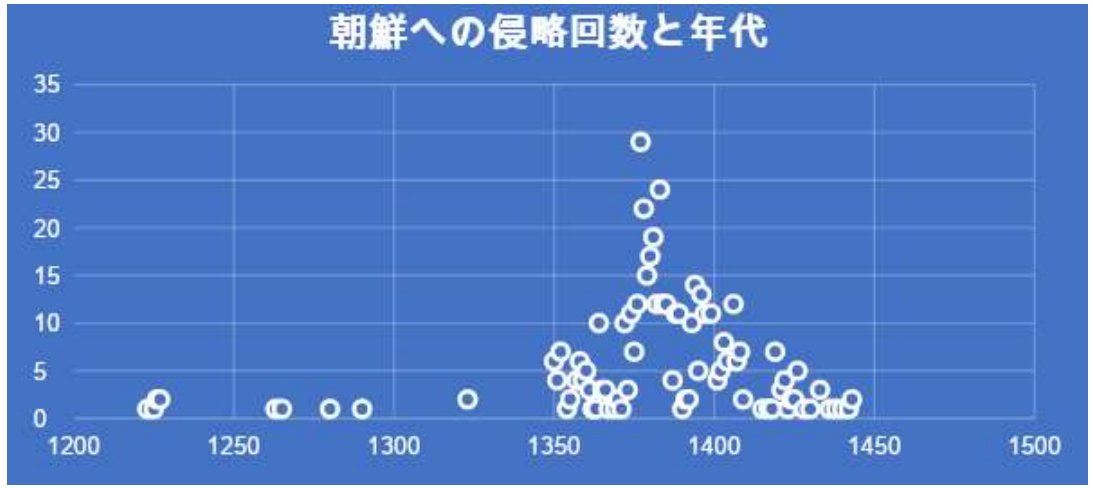
1.中世倭寇の活動と実態　（担当:羽田）

一　武器の変遷から見る倭寇

【海賊行為を行う倭寇】
そもそも前期倭寇の出現及び、海賊行為の増長はモンゴル帝国の衰退、東アジアの秩序が崩れたことが大きい。ここで注目したいのは、前期倭寇の海賊行為が100年を超える長期に渡ったことである。

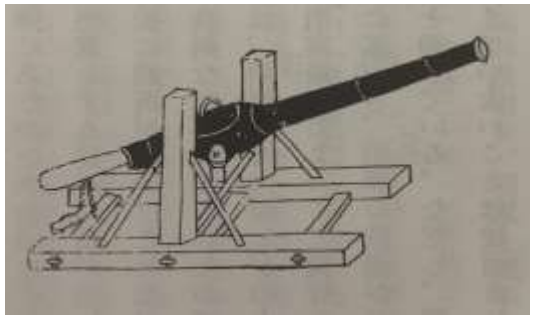
【1380年の倭寇撃退】
1220年頃から徐々に顔を現す倭寇は、1350年頃を機に各地を襲うようになる。1380年の倭寇との対峙で李成桂の活躍。同時期、崔茂宣による『火砲』の製造及び使用が倭寇を撃墜したとあり、当時の勝利を祝し「賀崔元帥茂先破鎮浦倭船ー公始作火砲」という詩が残っている。その後、侵攻が徐々に減っているのが窺える。崔茂宣の登場を機に、朝鮮では火器が発展し「火薬修練法」を後世に残す。

【火器の進化】
火器の登場によって朝鮮が倭寇を撃退したが、上記のような勝利は多くなかった。その時代背景として、倭寇も時代と共に侵攻方法が変化する。その一つとして、「船」である。前期倭寇に見られる船は、小さい船を幾十幾百隻で侵攻してきたが、後期倭寇になると大船による侵攻に変化する。右図のような、矢を飛ばす火器では対処が追いつかなくなる。しかし、こういった関係が、朝鮮・明における火器の進化につながる。



「倭寇-海の歴史-」より作成

https://www.chosonsinbo.com/jp/2007/09/sinbo_070908/


大船に対抗するために用いられた仏狼機砲「東アジアの兵器革命」P20

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

3.中世倭寇の影響力と爪痕　（担当：森田）

ー　史料に残された記述から推察する中央政府と後世へのインパクト ～アウトローが築いた国家のルール

断崖絶壁の街は
悪人には最高の立地
であった!!

【海賊とのつながりが公に存在していた地域の事例】

中国の詔安県（しょうあんけん）の沿海地域に位置する梅嶺（ばいれい）では密貿易経営を行うとともに海賊勢力とも結びついていた。
郷里で暮らす者たちは、海賊となった親族を恥じることなく資金が送られてくることを地域社会の中で得意気に自慢していたという。

活発な密貿易や
海上貿易から…

人身売買へと発展

人質・捕虜

日本の
対馬

中国の
沿海地域

日本はその捕虜を返す変わりに銀を得るビジネスを行った

テーマ構成

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去・現在の世界の海賊

後期倭寇とモンゴル帝国の関連性（15-16世紀）

出所：世界の歴史まっぷ

北虜（モンゴル帝国没後・北元→オイラト）

1429年：南京→北京遷都
1449年：土木の変　オイラト部
エセン・ハンが正統帝を捕虜に
1550年：庚戌の変　タタール部
アルタン・ハンが北京包囲

南倭（倭寇対策）

明は朝貢貿易以外を認めない
『海禁政策』により

密貿易・後期倭寇が発生

北辺防備軍事費・税の銀収
～明国内『銀』の枯渇～

⟷

大量の日本銀流入（密貿易）
後期倭寇の要因の１つ

1567年：隆慶帝（穆宗）　財政再建と経済繁栄の為に
倭寇とモンゴルに貿易を認める柔軟策実施
「モンゴルと和議」「海禁解除、民間貿易認可」

▼

北虜南倭の終息・経済安定へ

▼

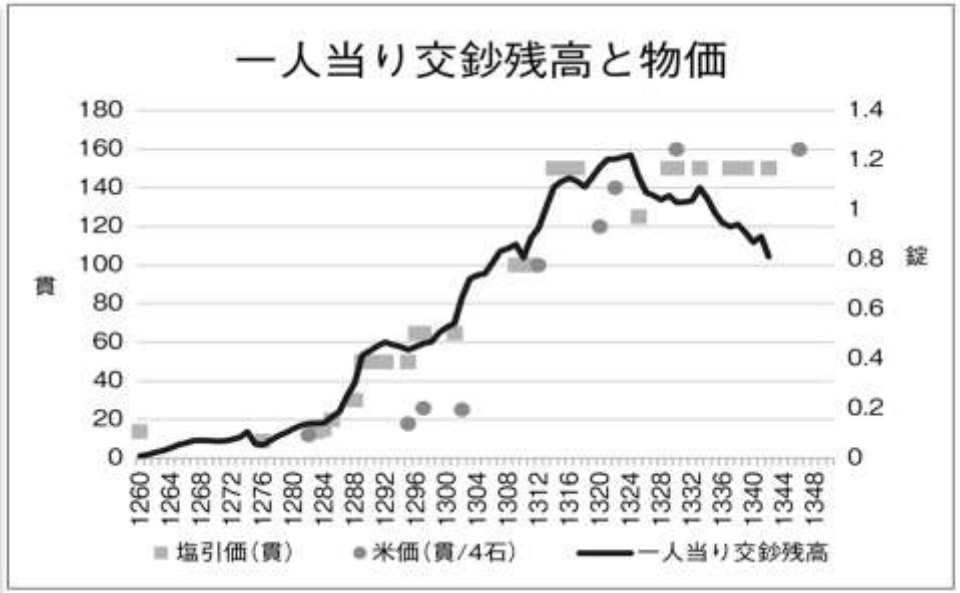
貿易商人の海外移住→華僑社会形成の初期
（東南アジア港湾都市：ﾏﾆﾗ・ﾎｲｱﾝ・ﾌﾟﾉﾝﾍﾟﾝ・胡椒港…）

倭寇の活発化は、元・明の経済・通貨政策が揺らいだタイミングで起こった

●経済が混乱し通貨の価値が揺らぐ＝両王朝の統制力が低下 ⇒周辺地域で海賊・海商が活発化

●広大な帝国を維持するコストをまかなえるだけの財政政策を実行することは、この時代には難しかった？

● 現代は？ 通貨は国のどこでも同価値で使える。通貨・金融政策は国の政策を反映しつつ、経済の専門家が取り仕切る



元(1260－1368)

- 世界初の紙幣を発行。西方貿易に銀が必要で補完のため
- 皇帝の後継者争いの激化、日本出兵などの戦費負担の増大などから紙幣を乱発
- 1200年代末から発行残高が急増、1280年→1320年に物価は8倍強に！

明(1368－1644)

- 元末の紙幣混乱を避けるため銅銭を発行。しかし銅不足から供給は限定され、現物経済に依存した
- 1375年、紙幣の発行に踏み切るが、今度は大量発行が続き、価値低下が止まらず。財務規律が機能しなかった
- 実質GDPは明代を通して0.26%と低くとどまった。明末1620年の一人当たり実質GDPは980年と同水準だった

第２章 大陸との国内事情

朝鮮から見た倭寇

前期倭寇と高麗

高麗は主に被害にあっていた国である。

- 穀物や人間が略奪をされていた。
- 高麗が滅び、朝鮮王朝が始まった要因の一つである。

後期倭寇と朝鮮

倭寇の影響をかなり受けた国である。

- 前期に受けた被害の解決に努める。
- 倭寇の鎮圧と懐柔。
- 民衆に大きな負担をかけた。

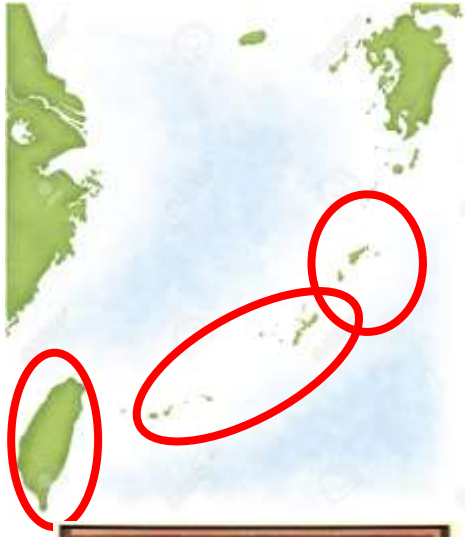
新羅

国家規模で海賊行為をしていた国である。

- 飢饉の影響で日本に対して襲撃をしていた。
- 変化が多い時代で政治的に不安定な時期も多い。→日本に帰化する人多数。

中世の琉球・奄美・台湾と倭寇

琉球：以前からヤコウガイ交易、奄美でカムイ焼きの生産、輸出
奄美は日本本土からの流刑地、移住先にも
１３、１４世紀には３人の王が統治→三山時代　15世紀に統一
他国と活発な交易→中継貿易により繁栄
倭寇の被虜人や漂着した朝鮮人を本国へ送還
倭寇が密貿易　倭寇が琉球国王を名乗り貿易を行う
琉球から倭寇に参加した者も　琉球に倭寇が入り込む



明・・・元との戦争の為、馬、硫黄が必要になる。
倭寇に悩まされる。→海域の秩序を守る。

明からの優遇措置・・・他国よりも多い朝貢回数/船や人材の贈与

しかし、世界情勢の変化に伴い衰退、倭寇的な交易に変化していく。

台湾：統一されてない。様々な原住民が暮らす未開の地、密貿易の拠点
逃げた倭寇がたどり着く地、交易を行う原住民も
オランダ東インド会社による統治
英雄・最後の倭寇　鄭成功による統治

テーマ構成

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去・現在の世界の海賊

3章 日本の国内事情

1.倭寇発生当時の政治・経済状況　（担当：多田）

政治

北朝と**南朝**二つの朝廷が併存

王権分離状態

日本の各地の守護や国人たちが**北朝**あるいは**南朝**に与し、**それぞれが勢力を拡大**し、**長期化**

朝廷同士の争いから

日本全国に広がる戦乱

大規模な戦が続き

南北朝の動乱

経済

自給自足の荘園経営の崩壊

経営権の主体：荘園領主→中小名主級

手に荘園領主の隷属関係から独立

経済の中心が京都から地方に移る

地方経済が発展し

それに伴う貧富の差の拡大

貧しいものが徒党を組んで

倭寇の土台に

財貨経済

多くの金銀財宝・米銭を蓄積して、有徳な百姓、有徳人を生み出す経済

価値観変化

（土地 → 財貨を重視）

名工・名匠が名器・名作を発表　金銀が流通貨幣というより、財宝。

職人気質の発生し産業化が進む。

倭寇にとって有力な武器、輸出モチベーション、　貿易の土台となった。

第3章国内事情

2.当時の日本人はどう倭寇が映ったのか（担当：田中）

前期倭寇（14世紀-15世紀）

三島倭寇について

　壱岐・対馬・肥前松浦の士豪・商人・漁民が中心に、一部高麗の民も加えた武装集団。

→専門家でも活動域はいくつか説が出ている

前期倭寇に関わっていた人々

　対馬と壱岐に絞り、その地域の人々の環境や時代背景について調べていった。どちらも貿易中継地であり、国防の要でもある。

後期倭寇（16世紀）

後期倭寇に属していた日本人

　薩摩、肥後、長門などが構成として多かった。明の「海禁」をきかっけに止められたことにより、貿易を行うために行われたと思われる。

後期倭寇に関わっていた人々

　後期倭寇の活動域で描かれた地図などを元に海外ではどのように把握されていたのかを把握しつつ、歴史的な背景などを見ていった。

人々にとって倭寇は悪でも善でもなかった。

→室町時代には全国に「海賊」がいた。

→前期＆後期も「生きるための手段」の一つでしかなかったのではないかと思われる。

テーマ構成

1章 中世の武装貿易商人 倭寇

2章 大陸国と周辺国の国内事情

3章 日本の国内事情

4章 過去・現在の世界の海賊

４章 過去・現在の世界の海賊

海賊行為と私掠行為

※私掠（しりゃく）

海賊行為

⇨ 平時に公的権力の認可を受けない海上での非合法な掠奪行為

私掠行為

⇨ 戦争状態に公的権力から敵国の船を攻撃し船や積み荷、荷物を奪う（**私掠**免許）許可を受けた民間人（私掠者）による合法的な掠奪行為

共通点：海上での**略奪行為**

相違点：政府の認可があるか否か　戦時中か否か

出典:オーシャントラスト

※エリザベス女王からナイトの称号を受ける海賊フランシス・ドレーク

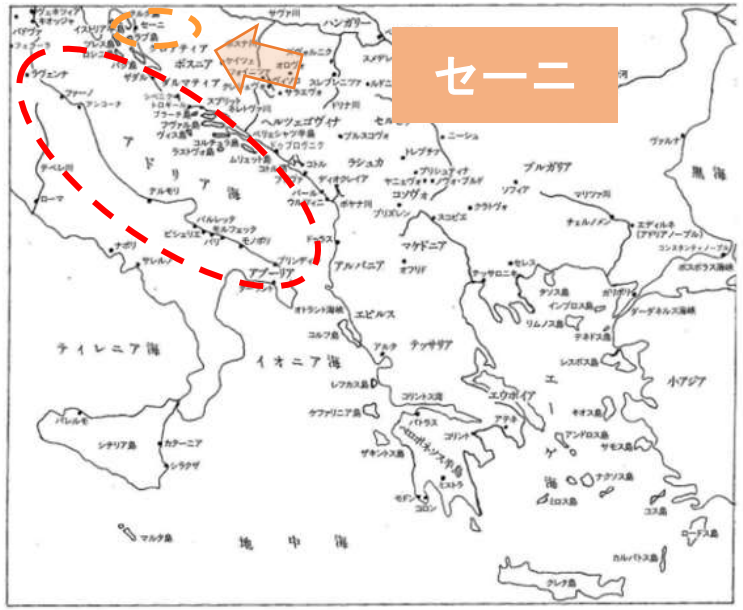
時代に振り回された海賊

・戦時中は**英雄**として国家から讃えられる

・非戦時中は**悪者**として国家から弾圧を受ける

海賊は国家にうまく利用された被害者的側面を持つのではないか？

４章 過去・現在の世界の海賊



出典：アドリア海の海賊ウスコクP.12

ウスコクとは？	
活動時期	16世紀～17世紀
活動場所	クロアティア セーニ
特徴	多数が無給の非正規兵
	一部ハプスブルク帝国兵士として給与を与えられた
	暮らしていくために略奪 ただし、帝国に利得の一部を献上

ハプスブルク帝国

ヴェネツィア共和国

オスマン帝国

都合の良い海賊？

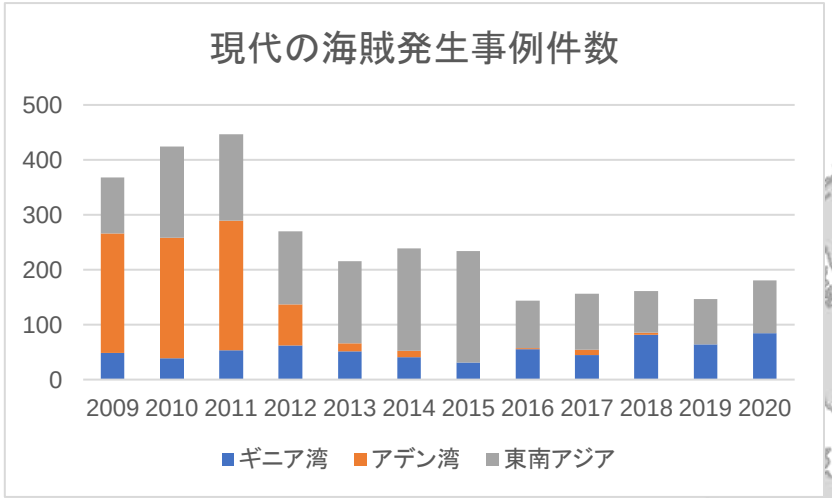
- ✔ 海賊は悪かと言われると、倭寇やウスコクを見ても必ずしも悪というわけではない
- ✔ 右記の通り、米同時多発テロから20年が経過した。テロ行為は断固として認めてはならないが、タリバンは絶対的悪なのであろうか。
- ✔ メディアの論法を鵜呑みにすることなく、自らの頭で考えることが必要となる

出典：日本経済新聞2021年9月11日米同時多発テロ20年特集

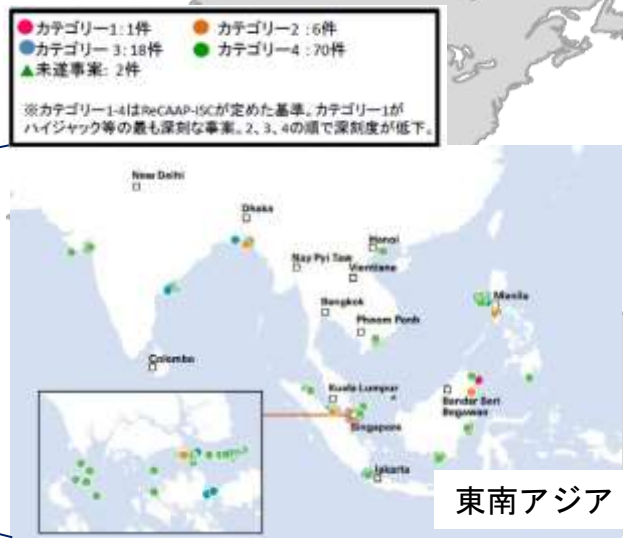
４章 過去・現在の世界の海賊

現代における海上輸送が拓いたグローバル化と海賊ビジネスが経済に与える影響

出典：外務省・防衛省ホームページ



出典：外務省ホームページより筆者作成



貧困 → 海賊ビジネス

生活の安定

各国の海賊対策

現代日本企業が倭寇的状況から得られる示唆

倭寇

- 明国内の銀需要に対して必要であった民間貿易
- 規制（海禁）と実体経済（銀需要）の狭間・ジレンマ
- 需要と供給（経済）が先行し、国家対応が遅れ

現代日本企業

- アジア・中国における需要に対して非正規ルートによる流通
- 規制と実需要の狭間・ジレンマ
- SNS・情報ネットワークによる需要と供給（経済）先行
- 企業戦略が後手（流通ルート構築・インフラ整備・法整備）

中長期的なグローバル動向を見極める、より高い力量が必要

得られる示唆

1．先手を打つ経営戦略

2．劇的な変化に極めて柔軟に舵を切る

「経営判断」と「組織風土・組織体制」

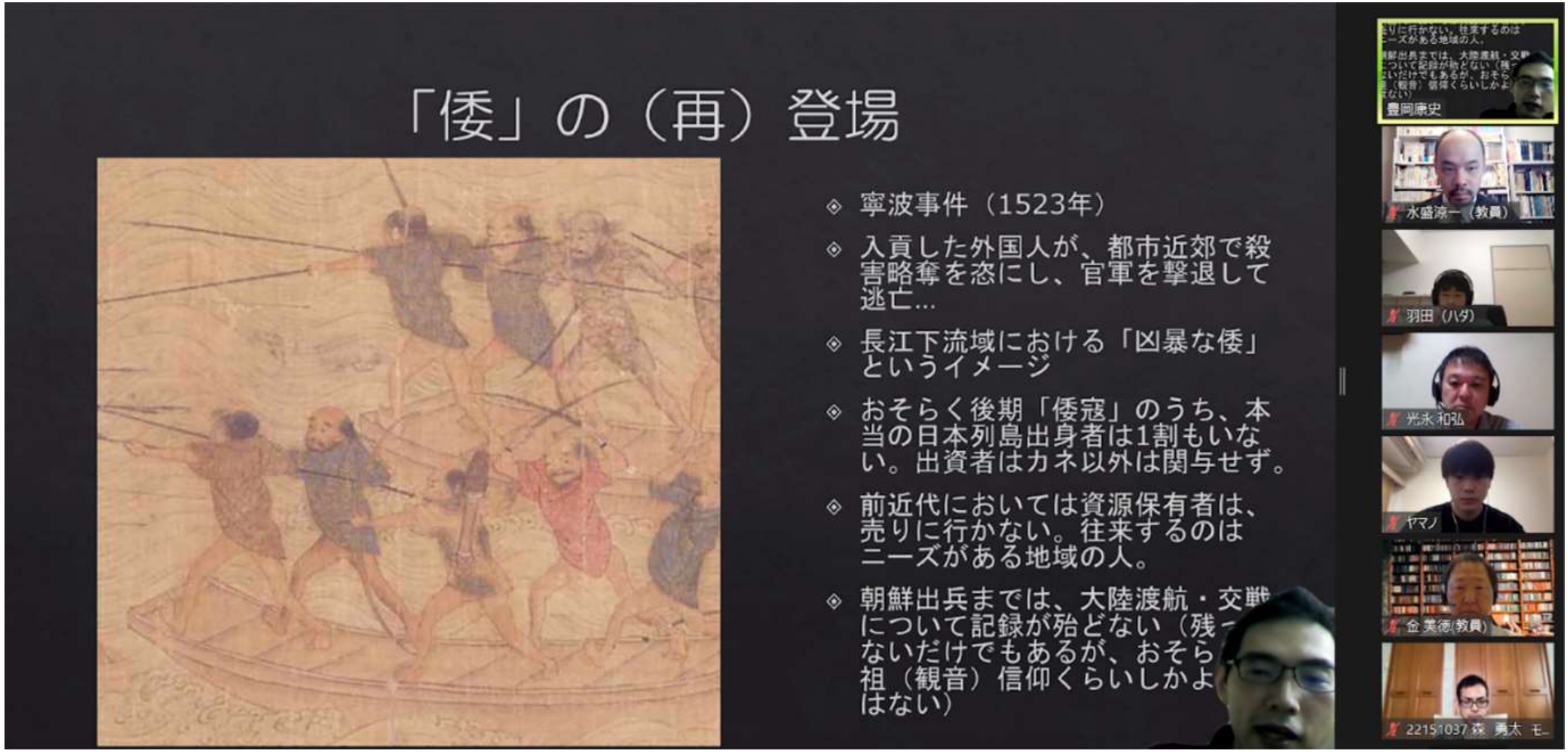
参考：フィールドワーク資料

フィールドワーク

インタビュー者名	所属等
豊岡 康史	信州大学人文学部　准教授
桃井 治郎	清泉女子大学 准教授

フィールドワーク2021.8月8日

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義



フィールドワーク2021.8月8日

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義

フィールドワーク2021.8月8日

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義

北虜南倭の時代

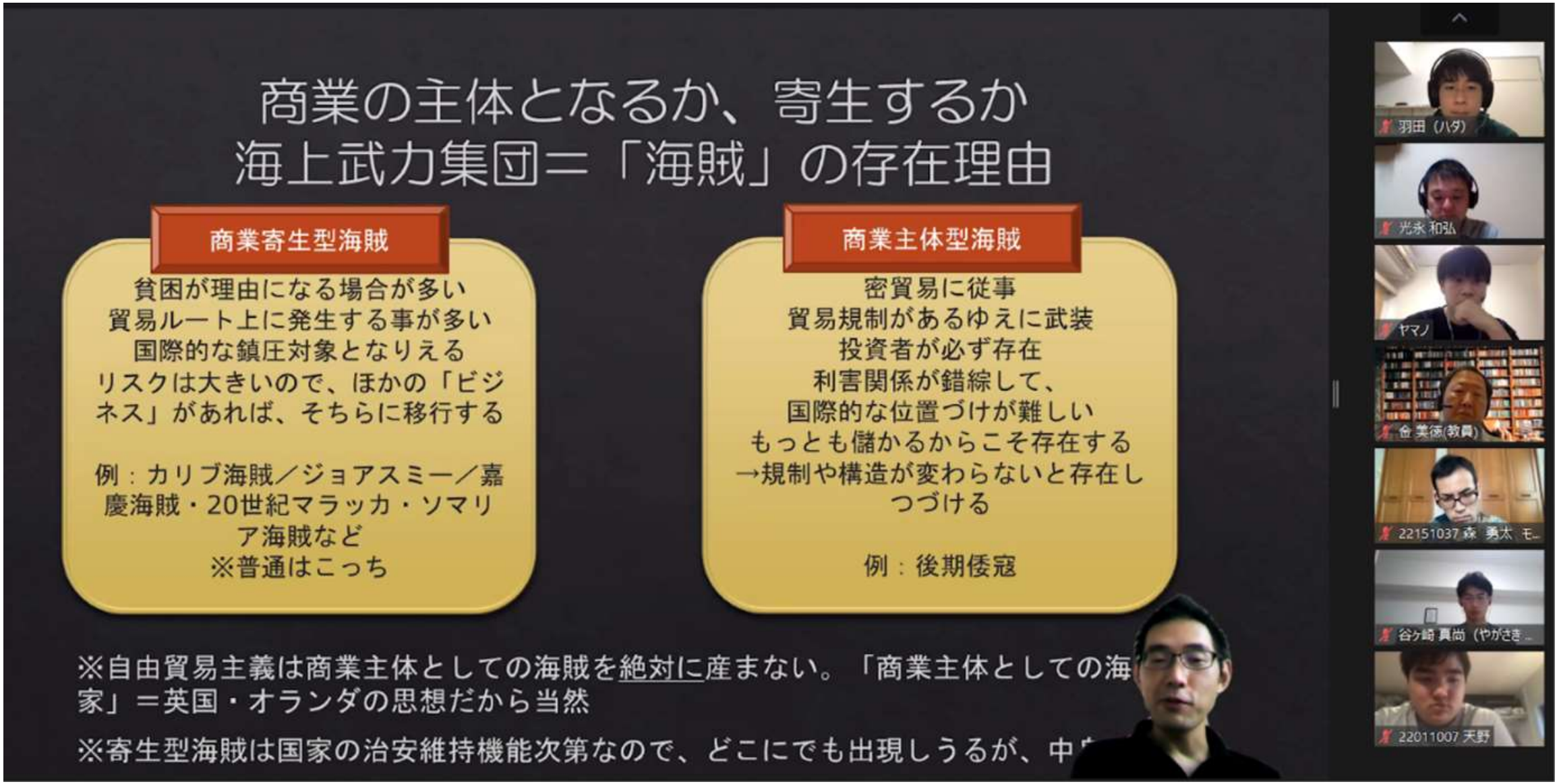
- 明朝の経済発展が、銀流入により進展
  - →周辺国の貿易ニーズが高まるが、明朝は治安維持と貿易利益独占の観点から民間貿易を禁絶
  - →経済的なニーズと、国家管理が衝突：武装した貿易当事者の登場

北辺防衛という、銀流通のポンプ（マッチポンプ？）

：宋代も同様：経済発展のひとつの要

フィールドワーク2021.8月8日

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授よりオンラインによる講義



フィールドワーク：清泉女子大学 桃井准教授

テーマ：「16世紀から19世紀初頭の北アフリカ海賊」をテーマに近代国際秩序の形成まで

Largest Cities in Western Europe, ca. 1500. There were as many large cities in the Italian peninsula as in all of the rest of western Europe.

清泉女子大学 桃井 治郎 准教授

フィールドワーク：清泉女子大学 桃井准教授

- ✓ 16世紀頃の地中海では、大きく分けるとスペイン帝国・オスマン帝国という2つの帝国が向かい合っていた
- ✓ 1492年にスペインがグラナダを支配し、レコンキスタ（再征服）を完成
- ✓ イベリア半島を追われたイスラーム教徒やユダヤ教徒などが北アフリカに移住
- ✓ スペインを追い出されたことによる復讐心から略奪を行う者もおり、それが北アフリカ海賊の始まりとなった（有名なのがウルージとハイルッディーン）
- ✓ 1538年、神聖ローマ帝国、ヴェネツィア、ローマ教皇領は、神聖同盟を結成し、同年、ギリシア西岸のプレヴェザでオスマン帝国軍と交戦
- ✓ 全面対決を前に神聖同盟側の艦隊司令官が撤退し、戦闘は終結

プレヴェザの海戦

フィールドワーク：清泉女子大学 桃井准教授

- ✓ 17～18世紀の地中海世界は、ヨーロッパ諸国の関心が、地中海から大西洋やカリブ海、インド洋などに移っていった
- ✓ ナポレオン戦争後の1814から15年、ウィーン会議が開催され、これ以後の国際秩序はウィーン体制と呼ばれるようになる
- ✓ ウィーン体制は、正統性主義・力の均衡・協調外交が特徴であり、その後、列強間で国際問題に関する協議が行われ、北アフリカ海賊の廃絶の決議がされる
- ✓ このような状況下で、1830年にフランスはアルジェを植民地支配、チュニスと条約を締結し、アルジェとチュニスは、海賊の廃絶を明言しなかったものの、実質的には消滅

ウィーン会議

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授

2021/10/09
多摩大学 学長主催インターゼミ

16世紀から19世紀初頭の北アフリカ海賊
― 近代国際秩序の形成 ―

清泉女子大学 文学部 文化史学科
准教授 桃井 治郎

内容

1．北アフリカ海賊の誕生
2．17～18世紀の北アフリカ海賊
3．アメリカ合衆国と北アフリカ海賊
4．北アフリカ海賊の終焉
5．近代国際秩序の形成
6．近代世界システムと北アフリカ海賊

1500年の地中海の状況

1．北アフリカ海賊の誕生

・1492年、スペインによるグラナダ支配
　＝ レコンキスタ（再征服）の完成

・イベリア半島を追われたイスラーム教徒やユダヤ教徒などが北アフリカに移住
（チュニジアのナプール焼きやシェシア帽製造）

チュニジアのナプール焼き

チュニジアのシェシア帽製造

1．北アフリカ海賊の誕生

・レコンキスタ後、イベリア半島を追われたイスラーム教徒やユダヤ教徒などが北アフリカに移住
（チュニジアのナプール焼きやシェシア帽製造）

・北アフリカを拠点にイベリア半島で掠奪を行う海賊が現れる
⇐ スペインは艦隊を派遣
　北アフリカの港（オラン、ベジャイア、アルジェなど）を攻撃し、砦を建設（=海賊の封じ込め）

ウルージとハイルッディーン

・エーゲ海レスボス島生まれの兄弟
　（＝「バルバロッサ兄弟」）
・東地中海で海賊行為
・1504年、2隻の小型ガレー船を率い、チュニス（ハフス朝）へ
・チュニスを拠点に海賊行為を繰り返す
（エルバ島沖で、ローマ教皇所有の大型ガレー船を拿捕）

＜フランス船とバルバリア海賊＞
エールト・アントニスゾーン作、1615年頃

ウルージとハイルッディーン

・1516年、アルジェを征服し、ウルージはアルジェの支配者になる
・ウルージは、対立する近隣のアラブ人首長を破り、周辺地域を支配

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授

ウルージとハイルッディーン

・アルジェリア西部にあるザイヤーン朝の首都トレムセンに遠征

・1518年、スペイン新王カルロス１世は、トレムセンに軍を派遣

→ ウルージはスペイン軍に敗れ、死去

ウルージとハイルッディーン

・ウルージの死後、弟ハイルッディーンがアルジェの首長を継承

⇔ スペインからの脅威に直面

・ハイルッディーンは、オスマン帝国のスルタン、セリム1世（在位1512-20年）に使者を送り、援軍を要請

→ セリム1世は、アルジェに援軍を派遣

・アルジェはオスマン帝国の属領となり、ハイルッディーンはオスマン帝国アルジェ領総督となる

チュニスをめぐる争い

・1534年、スレイマン1世（在位1520-66年）は、ハイルッディーンを北アフリカ総督に任命

→ 与えられたガレー船40隻を率い、ハフス朝チュニスを攻略

・1535年、スペインによるチュニス遠征

← カール5世自ら出陣

（500隻、2万5000人の兵士）

⇒ スペインがチュニスを攻略

<ラ・グレット港（チュニス）への攻撃>、フランス：ホーヘンベルフ作、16世紀

プレヴェザの海戦

・ハイルッディーンは援軍要請のため、再びイスタンブールに赴く

・スレイマン1世は、ハイルッディーンをオスマン帝国の海軍大提督に任命

・ハイルッディーンに対し、チュニス奪回ではなく、南イタリア襲撃を指示

プレヴェザの海戦

・南イタリアでのオスマン艦隊による海賊行為の激化

⇒ 1538年、神聖ローマ帝国、ヴェネツィア、ローマ教皇領は、神聖同盟を結成

・同年、ギリシア西岸のプレヴェザで、オスマン帝国軍と交戦（＝プレヴェザの海戦）

（神聖同盟側はドーリア、オスマン帝国側はハイルッディーンが艦隊司令官）

・全面対決を前にドーリアが撤退し、戦闘は終結

プレヴェザの海戦

<プレヴェザの海戦>、オスマン・ヌリ・パシャ作、1866年

プレヴェザの海戦以後

その後も、アルジェを拠点とする海賊が横行

1541年、カール5世は大軍を率いてアルジェ遠征

→ アルジェ沖で嵐に会い、敗北

1571年、レパントの海戦

（オスマン帝国艦隊 対 神聖同盟艦隊）

→ 最終的な決着はつかず

2．17～18世紀の北アフリカ海賊

17～18世紀の地中海世界

・ヨーロッパ諸国の関心が、地中海から大西洋やカリブ海、インド洋などに移る

・オスマン帝国がフランス、イングランド、オランダとカピチュレーションを結ぶ

・北アフリカ諸領とヨーロッパ諸国の間で、和平条約が締結

（ただし、北アフリカ諸領は貢納を要求）

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授

表1：北アフリカ諸領とヨーロッパ諸国の条約（17世紀）

年	アルジェ領	チュニス領	トリポリ領
1605		フランス	
1617	オランダ		
1622	オランダ	オランダ	
	イングランド		
1626	オランダ	オランダ	
1628	フランス		
1630	フランス		
1650			イングランド
1660	イングランド		
1662	イングランド	イングランド	イングランド
	オランダ	オランダ	
		フランス	
1666			
1666	フランス		
1668	イングランド		
1670		フランス	
1670	イングランド		
1676			イングランド
1679	オランダ		
1681			フランス
1682	イングランド		
1683			オランダ
1684	フランス		
1686		フランス	フランス
1686	イングランド	イングランド	
1689	フランス		
1690			フランス
1699	イングランド	フランス	

※ 条約の改正や更新を含む

表2：北アフリカ諸領とヨーロッパ諸国の条約（18世紀）

年	アルジェ領	チュニス領	トリポリ領	年	アルジェ領	チュニス領	トリポリ領
1703	オランダ		オランダ	1758		オーストリア	
1704		オランダ		1760	オランダ	オランダ	
1708		オランダ		1761			イギリス
1710		フランス		1762	イギリス	イギリス	
1712	オランダ		オランダ	1764	フランス		
1713	オランダ	フランス			ヴェネチア	ヴェネチア	
1716		イギリス	イギリス	1765		フランス	ヴェネチア
1719	フランス			1766			ヴェネチア
1720		フランス	フランス	1768	オランダ	フランス	
1725		オーストリア		1770		フランス	
1726	オランダ		オーストリア	1772	デンマーク		
1727	オーストリア			1774			フランス
1728	フランス	オランダ	オランダ	1780			フランス
1729	ハウーデン		フランス	1781		フランス	
1730			イギリス	1784		オーストリア	スペイン
1731	オランダ			1785			ナポリ
1736		スウェーデン		1790	フランス		
1741		オランダ	スウェーデン	1791		スペイン	
			ナポリ	1792		ヴェネチア	
1742		フランス		1793	ポルトガル		
1743		フランス		1794	オランダ		
1748		オーストリア		1795	アメリカ	フランス	スペイン
1751		イギリス	イギリス	1797			デンマーク
	デンマーク	デンマーク				アメリカ	アメリカ
1752			フランス	1798			スウェーデン
1754	スウェーデン		イギリス	1799	ナポリ	ポルトガル	ポルトガル
1757	オランダ			1800	フランス		

※ 条約の改正や更新を含む

2．17～18世紀の北アフリカ海賊

17～18世紀のヨーロッパ=北アフリカ関係

和平条約の締結

17世紀：フランス、イギリス、オランダ

18世紀：オーストリア、スウェーデン、デンマーク、ヴェネチア、スペインなど

→ 結果的に、北アフリカ海賊の活動は沈静化

3．アメリカ合衆国と北アフリカ海賊

1776年の独立宣言および1783年のパリ条約により、アメリカ合衆国はイギリスから独立

＝北アフリカ海賊の攻撃対象になる

1785年、地中海を航行するアメリカ商船2隻がアルジェ領のガレー船に拿捕される

⇒ 1795年9月、アメリカは、2万1600ドル分の銃器や船舶資材を毎年アルジェ領に貢納するという条件で、アルジェ領と和平条約を締結

3．アメリカ合衆国と北アフリカ海賊

1797年、アメリカとトリポリ領が和平条約締結

1801年5月、条約内容を不服として、トリポリ領が条約を破棄し、宣戦布告

トリポリ領による海賊行為に対し、アメリカは艦隊を派遣

同年10月、アメリカ艦船フィラデルフィア号が拿捕、乗員が捕虜となる

トリポリ戦争

1805年、アメリカ艦隊はトリポリ港を砲撃

同年6月、和平条約締結

貢納は行わない代わりに、フィラデルフィア号乗員の解放のための身代金支払いの名目で、アメリカが6万ドルの支払い

→ トリポリ戦争の終結

アルジェ領との衝突

米英戦争（1812-14年）の期間、アルジェ領はアメリカとの和平条約を破棄し、アメリカ船を拿捕

1815年、アメリカ艦隊がアルジェ遠征（艦隊司令官は、ディケーター）

→ アメリカ人の解放、和平条約の締結、貢納の廃止、アルジェ領による賠償金の支払い

4．北アフリカ海賊の終焉

19世紀初頭、イギリス退役軍人シドニー・スミスが北アフリカ海賊廃絶に向けて各国へ呼びかけをおこなう

各国に送ったスミスの呼びかけ書

「いまや、穏和で、産業発展し、文明の利益を最も享受する人々が暮らす文明化したヨーロッパは、アフリカ大陸西岸における黒人奴隷貿易の廃止の手段について議論をし、その巨大な大陸内部にまで商業の利益や人間・財産の安全の利益を広げる努力を行っている。そのようなときにそれと同じ［アフリカ］大陸の北岸について注意が全く向けられていないというのは驚くべきことである。そこでは近隣住民を抑圧するだけでなく、彼らを連れ去り、奴隷として買い上げ、彼らを使って武装船でヨーロッパ沿岸の勤勉な農夫や穏和な住民の家々を襲うトルコ人海賊が暮らしている」

各国に送ったスミスの呼びかけ書

「このような恥ずべき掠奪行為は人間性に反しているばかりか、最も悪質に商業活動を妨げている。というのも今日、商船の船員はみな、地中海であっても大西洋であっても、海賊にさらわれ、アフリカで奴隷にされるという不安を抱きながら航海をしているからである…知性と文明の進歩はどんなことがあろうと、このような海賊行為を根絶させねばならない…」

⇒ 人間性に反し、商業活動を脅かす反文明的行為として北アフリカ海賊を糾弾

ウィーン体制

ナポレオン戦争後の1814-15年、ウィーン会議が開催

これ以後の国際秩序をウィーン体制と呼ばれる

ウィーン体制

ウィーン体制の特徴

・正統性主義

・力の均衡

・協調外交（「ヨーロッパ協調」の時代）

← 列強諸国による会議外交が展開

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授

ウィーン体制と北アフリカ海賊

会議外交：
列強間で国際問題に関する協議が行われる

← 北アフリカ海賊についての協議
- ロンドン大使級会議（1816～18年）
- アーヘン会議（1818年）で、北アフリカ海賊廃絶の決議

アーヘン会議議定書

「諸代表は、平和的な商業活動に敵対するシステムをバルバリア諸領が放棄しない場合にはヨーロッパ列強は総同盟を結成することと、バルバリア諸領がとる熟考の末の［私掠行為の放棄に伴う］結果と自らの存在にまで影響を与える［その拒否に伴う］結果とについて彼らに真剣な態度で通告することを、バルバリア諸領に強い影響力を持つフランスとイギリスの全権代表に託した」

英仏艦隊による北アフリカへの通知

1819年9月、英仏艦隊はアルジェ沖に到着し、アルジェ領のデイとの交渉に臨む

ヨーロッパ側は海賊の廃絶を求める通告文をアルジェ領に提示

その後、チュニス領・トリポリ領にも海賊の廃絶を要求

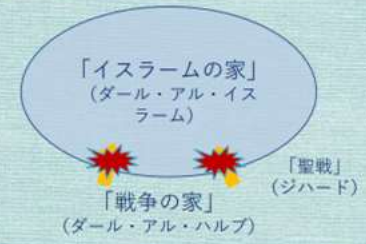
英仏連合艦隊による通告（1819年）

「ヨーロッパ列強は、全ての国の一般的利益に反するだけでなく、商業活動を行う人々の繁栄への希望をも打ち壊す海賊のシステムを廃絶することを決定した。もし、バルバリア諸領が全く平和的な商業活動に対する敵対的システムを保持し続けるのならば、ヨーロッパ列強の総同盟との対決を必ずや引き起こすであろう。…しかし、われわれは、海賊行為の継続による不吉な結果を予告するのと同時に、そのような災いを生むシステムを廃止するのであれば、ヨーロッパ諸国は、［北アフリカ諸領との］友好的関係を維持するだけでなく、お互いの臣民にとって利益的なあらゆる種類の商業活動をも積極的に奨励するであろうことも通達する。」

チュニスの回答書

「理由も正義もなく、すべての慣習を無視し、条約を踏みにじる人々は盗賊または海賊と呼ばれる。神のご加護により、あなた方の正確ではない手紙に相当するような慣習の無視や条約の侵害を我々が行ったことやそのような話を聞いたことはまったくない。……［そのような］我々が海賊や盗賊と呼ばれる謂れはない。……我々は、長期にわたり、船舶にまったく装備を施しておらず、敵に対してまったく害を与えていない。我々はこれまで武器を取ろうと考えたことはない。しかしながら、誰かから害を与えられた時には、我々は持てる力すべてをもって自分自身を守るであろう。なぜなら、誰もが自らの地位や名誉がただ犯されるのを黙って耐えることはできないからである。」

イスラーム国際秩序



両者の主張の相違

ヨーロッパ側：
北アフリカ海賊は、人道上の面からも、商業活動を妨げる面からも不正である

アルジェ・チュニス側：
従来の条約や外交慣習は遵守している。条約未締結国とは戦争状態にある。自衛のために海軍力は放棄しない

- 国際政治における正／不正認識の相違

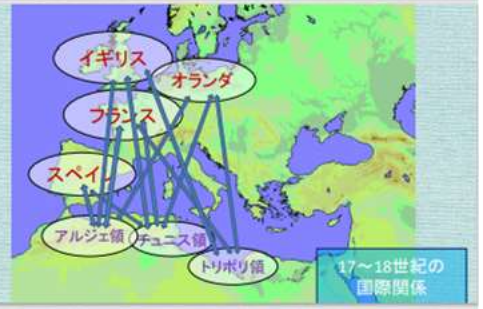
4．北アフリカ海賊の終焉

- アルジェとチュニスは、海賊の廃絶を明言しなかったが、実質的には消滅

1830年の解決
アルジェ：フランス軍の侵攻 → 植民地支配
チュニス：フランスとの条約締結
（海賊の廃止やサンゴ漁のフランスへの独占権付与、ヨーロッパ商人の活動自由化）
－ フランスによる政治経済的支配

5．近代国際秩序の形成

19世紀の国際秩序
- 国際社会の萌芽期
（「ヨーロッパ協調」の時代）
- 植民地支配の拡大



5．近代国際秩序の形成
（国際社会の萌芽期／植民地主義）

「内の論理」：
国際社会内部では、お互いの主権を尊重する「寛容」に基づく国際秩序
＝ ヨーロッパ協調の時代

「外の論理」：
国際社会の外部に対しては、ヨーロッパの規範やルールを強要する「文明化」に基づく国際秩序
＝ 植民地支配の時代

信州大学人文学部　豊岡 康史准教授

6．近代世界システムと北アフリカ海賊

世界システム論（イマニュエル・ウォーラーステイン）

15世紀後半にヨーロッパで生まれた資本主義的世界経済が発展と停滞の周期を経ながら、外延部を組み込んで拡張していき、世界全体を覆う近代世界システムとして生成されたとする歴史認識

・グローバル・ヒストリーとしての側面

・近代に生まれた世界システムが資本主義という特異な性質を内包するという側面

（「中心」と「周辺」の不等価交換による収奪構造）

6．近代世界システムと北アフリカ海賊

世界システム論：

「長期の16世紀」（1450年頃から1620-40年頃まで）

← 資本主義的世界経済の誕生・拡張期

「長期の17世紀」（1600年頃から1750年頃まで）

← 資本主義的世界経済の停滞・凝集期

「長期の18世紀」（1730年代から1840年代まで）

← 資本主義的世界経済の再拡張期

6．近代世界システムと北アフリカ海賊

「商品連鎖」

分業と基礎商品 (Commodity)の交易

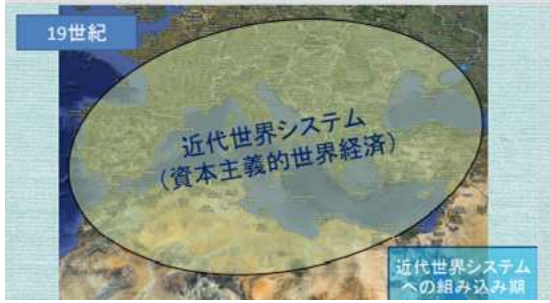
← 社会生活や生産活動における必需品として大量に輸送される商品

（北欧の木材やカリブ海地域の砂糖など）

≠ 奢侈品交易

「インターステイト・システム」

資本主義的世界経済を支える諸国家間の共通制度や共通規範



年間スケジュール

春

回	月	日	議　題	文献調査	フィールドワーク	備　考
1	4	17	初回学長講話 自己紹介 今年度テーマ方向性			Facebookグループ作成
2		24	各自問題意識を報告			
3	5	8	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		Google driveシェア アジア班メンバー確定
4		15	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		年間スケジュール確定
5		22	分担発表 研究計画発表ＰＰＴ作成	次回ベース文献疑問など報告		
6		29	研究計画発表ＰＰＴ作成	次回ベース文献疑問など報告		
7	6	5	研究計画発表	次回ベース文献疑問など報告		
8		12	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次		
9		19	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次		
10		26	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正	文献集計・目次	FW検討（仮）	
11	7	3	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
12		10	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
13		17	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
14		24	分担発表 中間発表ＰＰＴ確認・修正			
18	8	26	◆夏季合宿（中間発表） 箱根水明荘	発表者（役割分担）：1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・ＦＷ		
19		27	◆夏季合宿（中間発表） 箱根水明荘	発表者（役割分担）：1.研究概要、2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・ＦＷ		

年間スケジュール

秋

23	9	18	下期進行確認 分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		年間スケジュール再確認 下期加入メンバー確定
24		25	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
25	10	2	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
26		9	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
27		16	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
28		23	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
29		30	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	各自完成版を持ち寄る		
31	11	13	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
32		20	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
33		27	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
34	12	4	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
35		11	◆アクティブラーニング祭	アクティブラーニング(AL)祭　（多摩キャンパス）		
36		18	◆論文発表			
37		25	◆論文提出日			メール送付期限
38		8	2019年度最終講義			
39		22	◆論文提出/懇親会 （年度最終日）	最終論文（完成版）提出日		

参考文献・論文等(全91件)

文献

[1]田中　健夫 倭寇　海の歴史 講談社学術文庫 2012
[2]羽田　正 東アジア海域に漕ぎ出す　海から見た歴史 東京大学出版会 2013
[3]田中　健夫 倭寇と勘合貿易 ちくま学芸文庫 2012
[4]東京大学史料編纂 描かれた倭寇 「倭寇図巻と抗倭図巻」 吉川弘文館 2014
[5]吉成　直樹 琉球王国と倭寇 森話社 2006
[6]高野　秀行 謎の独立国家ソマリランド 本の雑誌社 2013
[7]村井　章介 中世倭人伝 岩波新書 1993
[8]寺島　実郎 脳力のレッスン180 -鄭和の大航海と東アジアの近世- 岩波書店 2017
[9]宇山　卓栄 朝鮮属国史　中国が支配した2000年 扶桑社新書 2018
[10]荷見　守義 世界史リブレット人38　永楽帝　明朝第二の創業者 山川出版社 2016
[11]岡田英弘/神田信夫/松村潤 紫禁城の栄光 講談社 2006
[12]岩井 茂樹 朝貢・海禁・互市―近世東アジアの貿易と秩序 名古屋大学出版会 2020
[13]岩井 茂樹 東洋史研究叢刊　中国近世財政史の研究 京都大学学術出版会 2004
[14]村井　章介 東アジアのなかの日本文化 北海道大学出版会 2021
[15]吉成　直樹 琉球王国は誰がつくったのか 七月社 2020
[16]榎本　渉 僧侶と海商たちの東シナ海 講談社学術文庫 2020
[17]桃井　治郎 海賊の世界史 中公新書 2017
[18]上里　隆史 海の王国・琉球 ボーダーインク 2018
[19]ピーター・T・リーソン 海賊の経済学 NTT出版 2011
[20]山内譲 海賊の日本史 講談社現代新書 2018
[21]竹田いさみ 世界を動かす海賊 ちくま新書 2013
[22]鈴木董 文字と組織の世界史 新しい「比較文化史」のスケッチ 山川出版社 2018
[23]桃木至朗編 海域アジア史研究入門 岩波書店 2008
[24]豊岡康史 <清朝史叢書>海賊からみた清朝ー十八～十九世紀の南シナ海 藤原書店 2016
[25]壇上寛 東洋史研究叢刊之七十八（新装版 16）明代海禁＝朝貢システムと華夷秩序 京都大学学術出版会 2013
[26]ウィリアム・H・マクニール 世界史（下） 中公文庫 2008
[27]白井米雄・桜井由躬雄編 新装世界各国史5 東南アジア史①大陸部 山川出版 1999
[28]池端雪浦編 新装世界各国史6 東南アジア史②島嶼部 山川出版 1999
[29]津本　陽 天翔ける倭寇＜上＞ 角川文庫 1993
[30]太田　弘毅 倭寇ー日本あふれ活動史 文芸社 2004
[31]関　周一 対馬と倭寇ー境界に生きる中世びと 高志書院 2012
[32]斉藤　忠 倭国と日本古代史の謎 学研M文庫 2015
[33]長野　正孝 古代史の謎は「海路」で解ける PHP新書 2015
[34]五木　寛之 サンカの民と被差別の世界 ちくま文庫 2014
[35]沖浦　和光 天皇と賤民の国 河出文庫 2019
[36]宮本　常一 日本文化の形成　講談社学術文庫 2014
[37]上原　善広 幻の韓国被差別民「白丁」を探して 河出文庫2019
[38]高田　貫太 海の向こうから見た倭国 講談社現代新書 2017
[39]瀬川　拓郎 縄文の思想 講談社現代新書 2017
[40]瀬川　拓郎 アイヌと縄文ーもうひとつの日本の歴史 ちくま新書 2016
[41]高橋　貞樹 被差別部落一千年史 岩波文庫 1992
[42]高橋　典幸 中世史講義 ちくま新書　2019
[43]村井　章介 古琉球 海洋アジアの輝ける王国 角川選書 2019
[44]岡本　隆司 日中関係史「政冷経熱」の千五百年 PHP新書 2015
[45]高野　澄 歴史を変えた水軍の謎 祥伝社黄金文庫 2012
[46]小川　雄 水軍と海賊の戦国史 平凡社 2020
[47]清水克之 戦国大名と分国法　岩波文庫　2018
[48]井沢元彦 逆説の日本史9戦国野望編　鉄砲伝来と倭寇の謎 小学館文庫 2005
[49]田中　健夫 東アジア通行圏と国際認識 吉川弘文館 1997
[50]村井　章介 国境を超えて-東アジア海域世界の中世 校倉書房 1997
[51]百瀬　宏 北欧史 山川出版社 1998
[52]Regis Boyer（レジス・ボワイエ）La vie quotidienne des Vikings（ヴァイキングの暮らしと文化）白水社 2019
[53]伊藤　潔「台湾」中公新書 1993
[54]辟化元「詳説　台湾の歴史　台湾高校歴史教科書」雄山閣 2020
[55]大東　和重「台湾の歴史と文化」中公新書 2020
[56]楊　合義「台湾の変遷史」展転社 2018
[57]荒野泰典/石井正敏/村井章介編 日本の対外関係　倭寇と「日本国王」吉川弘文館 2010
[58]村井章介 古琉球　海洋アジアの輝ける王国 角川選書 2019
[59]入間田宣夫/豊見山和行 北の平泉、南の琉球 中央公論新社 2002
[60]上里隆史 マンガ　沖縄・琉球の歴史 河出書房新社 2016
[61]模澤和夫 これならわかる　沖縄の歴史　Q &A　第２刷 大月書店 2020
[62]渡邊大門 流罪の日本史 ちくま新書 2017
[63]榎本渉 僧侶と海商たちの東シナ海 講談社学術文庫　2020
[64]宝賀寿男 古代氏族の研究①和珥氏-中国江南から来た海神族の流れ 青垣出版 2012

参考文献・論文等

[65]海賊の文化史（海野弘）
[66]世界史を作った海賊（武田いさみ）
[67]上田信（中国の歴史09　海と帝国　明清時代）
[68]岡田英弘（読む年表　中国の歴史）
[69]田村実造（中国文明の歴史７　大モンゴル帝国）
[70]杉山正明（モンゴル帝国の興亡　下　世界経営の時代）
[71]中島楽章（14-16世紀,東アジア貿易秩序の変容と再編―朝貢システムから1570年システムへ―）
[72]山本秀也（習近平と永楽帝　中国帝国皇帝の野望）
[73]出口治朗（全世界史（下））
[74]森平雅彦（世界史リブレット99―モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島―）
[75]麻生川静男（本当に悲惨な朝鮮史―高麗史節要を読み解く―）
[76]越村勲（アドリア海の海賊ウスコク）
[77]越村勲（16世紀・17世紀の海商・海賊アドリア海のウスコクと東シナ海の倭寇）

論文

[1] 三宅　亨 倭寇と王直 桃山学院大学総合研究所紀要 第37巻第３号 2012 https://www.andrew.ac.jp/soken/pdf_3-1/sokenk193-2.pdf
[2]北尾悟，西村 さとみ 倭寇とは何か:歴史教育と歴史研究をめぐって 奈良女子大学教育システム研究開発センター 2018 https://opac2.lib.nara-wu.ac.jp/webopac/TD00003412
[3] 吉成　直樹 琉球・沖縄文化の形成と外的衝撃 古代～中世平行期を中心に 法政大学学術機関リポジトリ 2013 http://hdl.handle.net/10114/9293
[4]稲本 守 欧州私掠船と海賊-その歴史的考察- 東京海洋大学研究報告 2009 http://id.nii.ac.jp/1342/00000342/
[5]真栄平　房昭 明朝の海禁政策と琉球：海禁・倭寇論を中心に 交通史研究67巻(2008)　2008 https://doi.org/10.20712/kotsushi.67.0_61
[6]二谷　貞夫倭寇対策と通信使の創設：室町時代の朝鮮通信使 中等社会科教育研究巻33, p.103-106　2015
https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/53231#/.YKduKqj7RPZ
[7]近藤　浩一東アジア海域と倭寇-9世紀末の新羅海峡との比較史的考察を通して-京都産業大学論集.人文科学系列.47巻.p.123-145 2014
https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&ved=2ahUKEwja4Kqzv9zwAhXJUN4KHaT3CCIQFjAAegQIAxAD&url=https%3A%2F%2Fksu.repo.nii.ac.jp%2F%3Faction%3Drepository_uri%26item_id%3D1407%26file_id%3D22%26file_no%3D1&usg=AOvVaw0hOE22LbHf07-r8HWi-Dmp
[8]浅川滋男 東アジア漂海民家船住居 鳥取環境大学紀要創刊号(2003.2)pp.41-60　2003
[9]逸見　真 国際法における海賊行為の定義 https://www.ymf.or.jp/wp-content/uploads/58_8.pdf
[10]中島楽章 14-16世紀,東アジア貿易秩序の変容と再編―朝貢システムから1570年システムへ
[11]豊岡康史 清朝と旧明領国際関係（1644-1840）

その他

[1]外務省 ソマリア沖・アデン湾における海賊問題の現状と取組 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/pirate/africa.html
[2]金柄徹 「倭寇」から眺める海域世界 三田文学 No.139秋季号2019 2019
[3]コトバンク　https://kotobank.jp/word/%E6%B0%B4%E5%A4%AB-461337